

# 平成 19 年度 ITP 派遣報告書

東京外国語大学大学院

地域文化研究科

博士後期課程二年

小池まり子

## 1. 研究の概要

### 【研究テーマ】

現代バリ社会における部落への帰属／非帰属をめぐる内部対立の過程と要因

### 【研究の目的】

本研究は、現代のバリにおいて、部落（バンジャル）への帰属／非帰属をめぐる構成員が衝突し、非帰属を示した者をバンジャルから完全追放する動きへと発展する内部対立を取り上げ、一見社会秩序が保たれているかのように見えるバンジャル内部で、なぜ非帰属を主張する人々が現れるのか、その内部対立の要因と経緯、および解決方法を明らかにし、部落（バンジャル）の成員であることの意味を問い直すことを目的とする。

### 【研究の具体的内容】

インドネシアでは、公用語としてインドネシア語が広く使われているが、本研究で扱うバリのバンジャルでは、日常的に地方語であるバリ語が用いられており、バンジャルの慣習法及びクラマ・バンジャル（バンジャル内の各戸長からなる寄合）の会合の内容を理解するためには、バリ語を熟知する必要がある。したがって、平成19年度の研究においては、ウダヤナ大学文学部の外国人向け語学コースにてバリ語を習得する。並行して、平成19年9月に行った現地調査で得たデータをもとに、ウダヤナ大学の教授から研究テーマについての指導を受けて、具体的な調査地を選定する。実際の調査は、平成20年度に行う予定である。また、地方新聞社に収蔵されている過去記事からバンジャル内部対立に関する報道記事を探し、社会レベルでバンジャル内部対立がどのように認識されているかを調べる。

### 【派遣先機関名】

インドネシア国立ウダヤナ大学文学部

### 【派遣期間】

平成19年12月17日から平成20年2月29日まで

### 【タイムスケジュール】

平成19年（2007年）

12月17日 成田空港→バリ・ングラライ空港

12月19日 ウダヤナ大学文学部 外国人向け語学コースに挨拶  
バリ語研修を担当する教授と今後の予定を立てる

12月26日 バリ語研修開始（全50回）

平成20年（2008年）

2月22日 バリ語研修終了

2月28日 バリ・ングラライ空港→成田空港

2月29日 帰国

## 2. 研究の具体的成果

① バリ語研修

本派遣では、ウダヤナ大学でバリ語を専門的に教えている二名の教授の指導のもと、全50回のバリ語研修を行なった。研修では、日常的に使用頻度の高い会話文から始め、バリの慣習、宗教儀礼に関する文章をもとに、文法、発音、読解、作文を行なった。

日常生活においても研修で習得したバリ語を実践するよう努めた結果、日常生活に支障がない程度の会話ができるようになった。また儀礼の参与観察では、儀礼の進行で使われるバリ語を聞き取れるようになり、以前に比べて儀礼の状況を把握できるようになった。この研修を通して、バリ社会において公用語のインドネシア語よりもバリ語の使用頻度が高いことを再認識し、また慣習、宗教儀礼を理解する上で専門用語をおさえる必要性があるため、バリ語の習得は不可欠であると改めて感じた。

## ② 研究テーマについての指導

ウダヤナ大学教授から、バリ語の指導と並行して、バンジャルの基本的知識と内部対立についての指導を受けた。

まず、バンジャル基本的知識の指導を受けて、参考文献や参与観察で得た知識を再構成することができた。

次に、バンジャルの内部対立について、特定の地域名をあげて内部対立の概要について指導を受けた。しかし、内部対立が起こった具体的な時期が不明なことが多々あり、地元新聞の報道記事の収集に結びつかないこともあった。だが、バンジャル内部対立についておおまかに把握できたことで、これまでの調査で得たデータを現在の社会的文脈に位置づけることができ、その後のインタビュー調査においてもインフォーマントと具体的な話を行なうことができた。

## ③ 地元新聞におけるバンジャル内部対立に関する報道記事収集

地元新聞社バリポスト社にて、バンジャル内部対立に関する報道記事の収集を行なった。記事の収集では、ウダヤナ大学教授の指導を参考にして過去の新聞記事に当たった。該当する記事はデジタルカメラで撮影し、画像データとしてパソコンに保存管理を行なった。

## ④ 参考文献収集

本派遣で収集した参考文献は、以下の通りである。

バンジャル及び内部対立関連文献(3冊)

慣習法関連文献(2冊)

バリ＝ヒンドゥー宗教関連文献及び雑誌(4冊)

ウダヤナ大学大学院文化研究による機関誌(8冊)

## ⑤ 長期調査のための調査地の選定

本派遣で、平成20年10月から予定している長期調査のための調査地を選定する予定だったが、派遣者自身が行なったインタビュー調査を通して、バンジャル内部対立は、例え過去の問題であったとしても、内部対立を経験した当事者にとっては、現在においてもセンシティブな問題であり続けることがわかった。

今後予定している長期調査で、特定のバンジャルに住み込んで人間関係を作りながら内

部対立について調査を行うことを想定すると、より慎重に調査地を選定することが必要であると判断し、本派遣時に調査地を選定することを見送りにした。

### 3. 今後の問題・課題

本派遣によって、バンジャル内部対立の問題が、地元新聞紙で取りあげられ、すでにバリ社会において多くの人々に共有されている一方で、当事者側にとっては例え表面上は調停済みであったとしても、依然燻り続けている問題であることがわかった。

今後の調査では、バンジャル内部対立当事者の心情に注意を払い、問題を再燃させないような調査方法を模索する必要がある。具体的な課題として、内部対立に関する先行研究及び参考文献を熟読し、調査方法の検討を行なう。それと並行して、平成 20 年 10 月より予定している長期調査のための調査地を、本派遣で得られたデータを整理していくなかで、指導教員と相談して決定したいと考えている。

本派遣で習得したバリ語は、今後も継続して学習を行ない、今後の調査で実践的に使用でき、かつ部落規則を読解できる程度まで上達させたいと考えている。

### 参考文献

小泉潤二訳 1990 『ヌガラ:19 世紀バリの劇場国家』みすず書房。(Geertz, Clifford, 1980, *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*, Princeton: Princeton Univ. Press.)

間苧谷栄 2000 『現代インドネシアの開発と政治・社会変動』剗草書房。

吉田禎吾編 1992 『バリ島: 祭りと花のコスモロジー』弘文堂。

図1 バリ島地図

